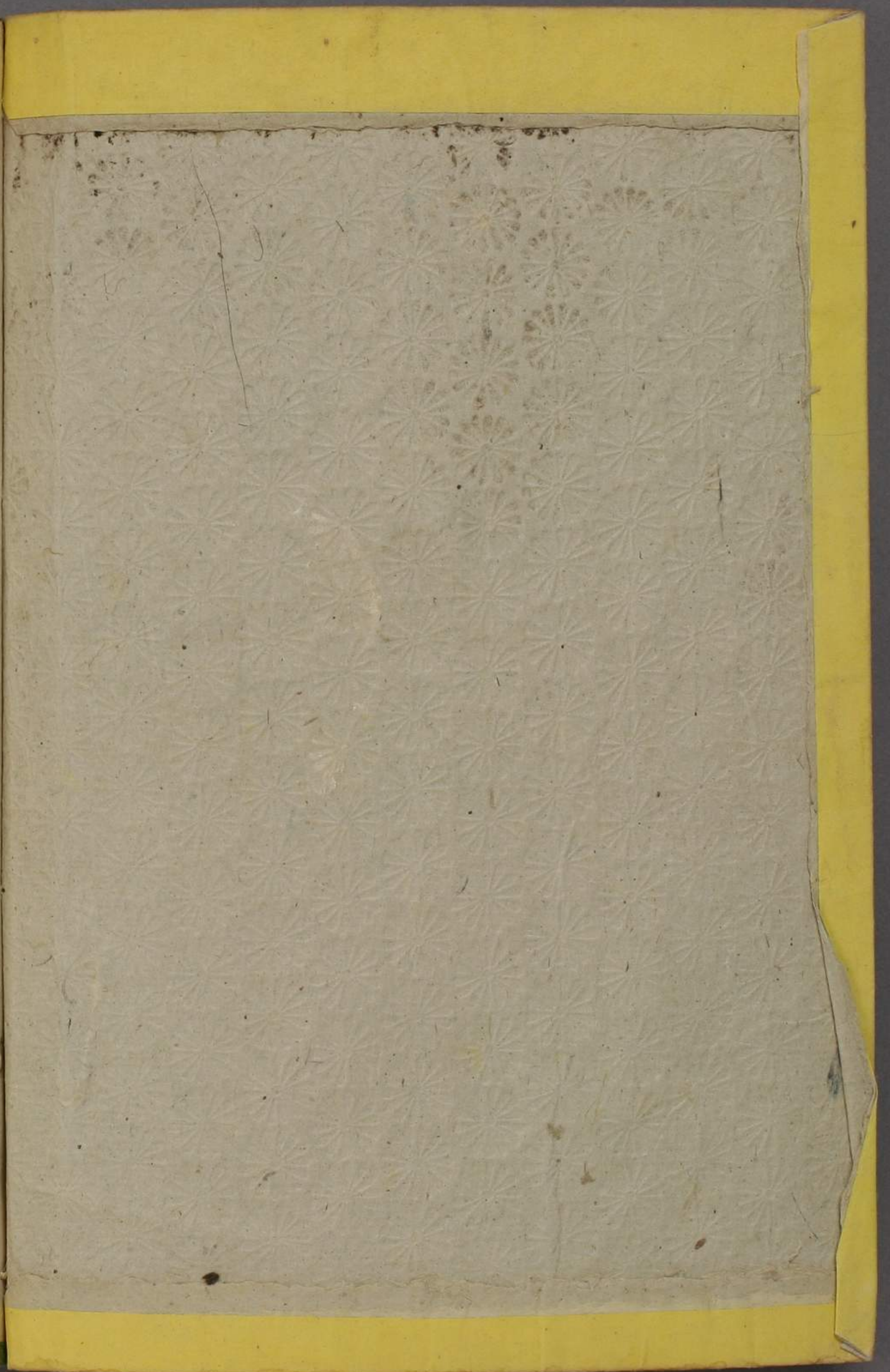


Faint, illegible text on the left page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is arranged in vertical columns and is too light to read accurately.



LINDT





西洋雜記卷之四

夢遊漫筆

第十四

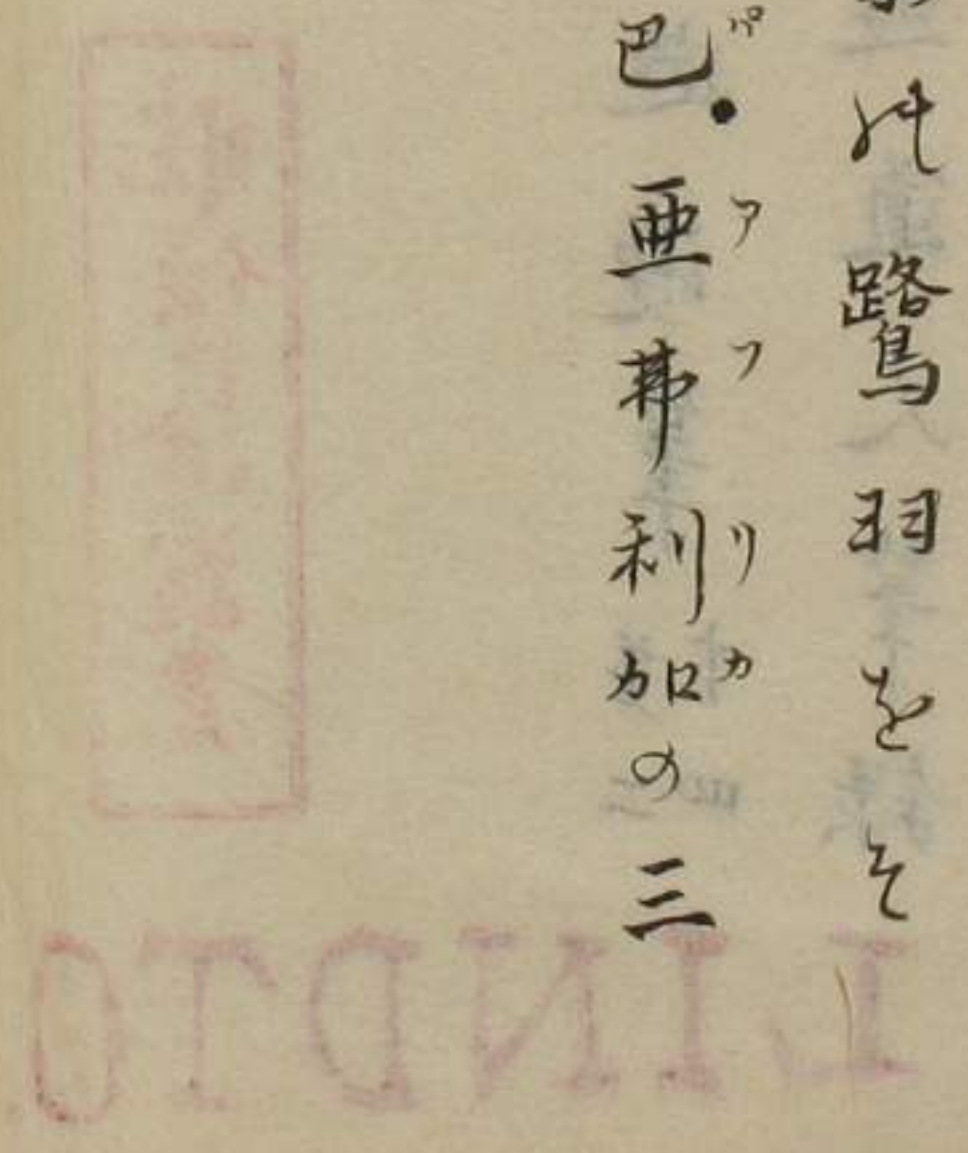
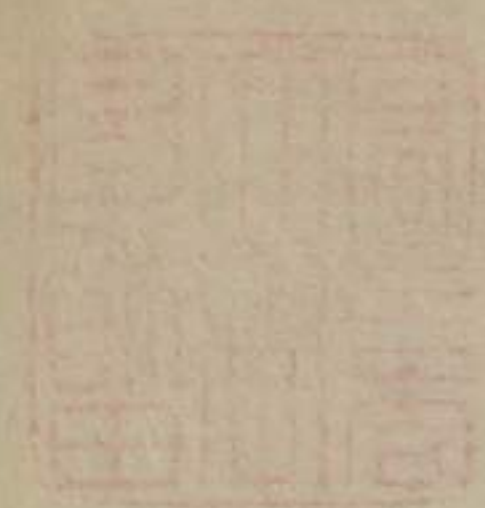
小東洋 夢遊道人筆錄

冠英「トルバント」の説

冠英和蘭語「コロオレ」とり小歐羅巴の諸國を以て
 帝王公侯の爵に隨ひて冠乃別各異なり皆
 な金銀諸寶珠以てこれを美飾して傳國
 乃宝とあり新主世に嗣ふ而後即位乃禮
 行ふ時にしかるべしその傳國乃宝冠珠戴
 きて群臣乃拜賀を受てこれを名きて「ケコロ



LINDTO.



オレトトトリふこれ冠^カ之トリ之冠^カなり 入^{セル}馬^マ泥^ニ
 亞^ア此^チ宝^{ホウ}器^キ其^シ第^{ダイ}一^{イチ}者^{モノ}「カ^カア^アレ^レル^ルゴ^ゴロ^ロオ^オ」帝^{テイ}所^{ショ}製^{セイ}の
 寶^{ホウ}なりとトリふまゝ百^{ヒャク}見^ミ西^{セイ}亞^ア都^ト児^ニ格^{カク}等^{トウ}諸^{シヨ}國^{クニ}
 の人^{ヒト}も之^{コノ}を頭^{カビ}に布^フ袋^{フクロ}以^テて施^シ廻^{マユ}してこれ^{コノ}を包^ツ
 て中^{ナカ}と^トな^リに舞^{マユ}して「トル^{トル}バ^バン^ンド^ド」とトリふこれを百
 見^ミ西^{セイ}亞^アの^ノ人^{ヒト}を「ド^ドヒ^ヒガ^ガ」とトリふ都^ト児^ニ格^{カク}の^ノ人^{ヒト}を「フル^{フル}ガ
 ツ^ツ」とトリふ都^ト児^ニ格^{カク}帝^{テイ}の^ノ戴^カく^ク不^フろ^ロ「トル^{トル}バ^バン^ンド^ド」を其
 形^{カタル}大^{ダイ}にして玉^{タマ}石^{シタマ}これ^{コノ}を飾^{カズ}る^ル三^{サン}束^{スツ}此^{コノ}路^ロ馬^バ羽^ウをそ
 の前^{マエ}に挿^カむ^クこれ^{コノ}亞^ア細^{シヨ}亞^ア・歐^{オウ}羅^ロ巴^バ・亞^ア弗^フ利^リ加^カの^ノ三

大^{ダイ}洲^{シュ}を表^{ヒラ}してた^タる^ルを乃^ナりま^マとトリふま^マ馬^マ哈^ハ默^{ツク}
 の子^コ孫^ソ都^ト児^ニ格^{カク}・亞^ア刺^シ比^ヒ亞^ア等^{トウ}乃^ナ地^チに^ニ何^{ナニ}家^ケと^トめ^メハ
 稱^{ナヅケ}して「エ^エミ^ミル^ルス^ス」とトリふ其^{コノ}人^{ヒト}をこ^コな^ナ緑^{キナ}色^{シキ}の「ト
 ル^{トル}バ^バン^ンド^ド」を戴^カく^クとトリふ

入^{セル}馬^マ泥^ニ亞^アの^ノ帝^{テイ}傳^{デン}回^{カイ}の^ノ宝^{ホウ}器^キの^ノ説^{セツ}
 入^{セル}馬^マ泥^ニ亞^アの^ノ帝^{テイ}に傳^{デン}回^{カイ}乃^ナ宝^{ホウ}器^キ十^{ジュウ}二^ニ種^{シュウ}何^{ナニ}もこ
 き^キ成^ナ「レ^レ井^イキ^キス^ス・イ^イレ^レセ^セク^クヒ^ヒア^ア」ま^ま「ケ^ケレ^レ井^イノ^ノオ^オデ^デイ
 ン^ン」と^トり^リ其^{コノ}中^{ナカ}八^{ハチ}種^{シュウ}を^ヲこ^コれ^レを^ヲも^ヲろ^ヲ回^{カイ}中^{ナカ}拂^フ郎^{ロウ}菴^{カン}
 泥^ニ亞^ア道^{ダウ}の^ノ「子^コラ^ラレ^レム^ムベル^{ベル}ク^ク」城^{シヨウ}に^ニ藏^カの^ノ四^シ種^{シュウ}を^ヲこ^コ

物^{ウエ}斯^{スト}法^{ハク}畧^イ道の「アリケン」城に藏むる第一
 も其國中興の聖主「カアレル・コロオト」上帝の所
 造乃宝冠にして金銀を以てこれ成製し高
 さ一尺餘上に十字の形をなす是れなる明珠
 美玉を以てこれ成飾り内を紅なる天鵝絨と
 以てこれを埒むる第一も「カアレル・コロオト」上帝の
 環^三上世より所傳の宝劍なり明珠成
 以てこれ成飾り銀成以て鞘となす第一四也
 「ゴウド・レイキス・フセプテール」
宝器名笈の如し
王者の抱し所の者 第一五也

「ゴウド・レイキス・アツプル」
宝器の名にして
形珠の如し 上に黄金
 の十字なり第一六も寶衣なり明珠を以て
 飾るとは第一七も古より所傳の帝の外套と甲
 冑なり第一八も宝襪子なり以上をなす「子ウ
 レム・ベルグ」城に在り第一九も美玉成以て造り
 たる宝箱なり是れ上古の聖人より所傳の
 物成納る第一十も「カアレル・コロオト」上帝の宝劍
 第十一も倣戒成記すの宝帶第一十二も古の
 聖人所傳の經典にして悉く金字成以て

記すを以て以上とんて「アーケ」城に對ふ

西洋諸國の名義

西洋諸國の名をその同基の始祖の名に依りてその始興の地名を以て總ての號とす。意太里亞國も上古此世より西奇里亞王「イタリウス」なる者の地を以て始て耕農の業を其土人亦教へたり。同く名く羅馬も其土人の始祖「ロムリニス」の名に因りて名く入ル馬泥亞乃古名也

「アレマニア」といひまゝ其土人の今自分稱して「テラツセランド」といふもその初王「アレマ」一名「テラトク」なる者の名に因りて他和菓乃古名也。「ハクアリア」といひ「那瑪ル加」の別名也。大泥亞といふの類なるも其始祖の名に因りて稱するを以て按ずるに晋の時に河南王葉延を祖の名に用ゐ玉號を吐谷澤と名る此類なるも「和菓・莫斯科亞・都兒格」ス「ウツセル」ト等もこれを始興の地又其國都名以て總

四の驛 くるはなるは漢郡唐列後み玉
号となりまゝ 我日本の總名成或は大和とい
ふがごとき者なり

依蘭地エイスラントの説

「エイスラント」を水地といふは甚なる其島北方
大洋中にありて氣候極く寒く五穀を産せ
ず草木少く土人獸皮衣を以て衣となし
魯骨成以て家成造る其地夏月を絶て雷
なくして冬月を雷甚多しといふ又一異事

なるは又此地なるを嵐なる海船志を嵐成
携つて此地に往てこれ試むるに放る存治す
る者なりといふ今地回して弟那瑪ネエルルカカ乃王
小属にまゝ思可存ス亜アの北海「オルカデカ」諸島
乃一に「タムス」なる者あり其地多く毒物毒虫
なりまゝ嵐なる海船より至る嵐も此島に
きたるを忽ち死をとりし

印度の人蛇成喰ふ説

印度の人を好むる蝮蛇を食ふこと他邦より

人の鰻魚を食ふが如くとりまゝ其地に一
種の大蛇を産む名あり「ホイクユア、キユ」云
その長は二丈二三尺ありて四五六寸あり太
さもまゝこれにかなふ好むは花より大樹の上
施廻し野羊熊鹿の類を生吞す國人法を設
ちてこれ地捕りまゝ以て食料とす彼地に
居る所の歐羅巴人も好む者もまゝ彼に
殺してこれ地食するところなり

按まゝにけ土蛇又「アメリカ」列島の産す「テ

イウホフ」と云ふ人「アメリカ」記行に
く「ハライバ」といふ所にけ予け蛇を捕り
て見ると長三丈餘太さハ大捕の如く淡
黒色なりこれハ其地の黒人等其地の野
に於て此蛇の野羊を吞み見ると鼻袖筒十三
寸一舟に突し其蛇の頭を碎てこれを得
り其野羊を蛇の腹を裂ておせし此蛇ハ
他の蛇よりも毒あり故に黒人ハこれ及ぶ
「ホルトガル和蘭陀人もその肉を食ふ」と

「キルギツセン」の説

韃靼部中意觀山の邊に一種の部落あり
「キルギツセン」とり其人岩石の洞に棲
し異形の鬼神を祈乞す強力多故あり
よく射獵をなす騎馬あり人死すれば
其屍を野に擲り鳥に啖せしむる不明
人所説の羅羅の鳥葬と相似し

「エツセド」の説

まゝ韃靼部中「シケイテ」の邊に一國あり「エツ

セド」とり其國都もまゝ「イツセド」と
り今も「カラコラン」と名く其地俗父母至親
若死すれば則ち相哀む其屍を食ひし
たりその國は富強し其上に金城ありてこれ
城郭へよく以て神と稱し毎歳一度是を祭ると云
小人國の説

和蘭語に小人城謂ふ「テウエルゲ」とり「プリ
ニラス」人の書に曰く小人國を東方印度の深山の
中にありとまゝ「スタラボ」人の書にも亞弗利加

湖邊境の地にありて其説に曰く小人を
乃人形軀をなす者なり長僅に一「エルレン」
エルレンハ此方の曲尺
二尺二寸四分余過ぎば八歳を以て老となす
乃婦人一産むるに五子を生むる其母の間に
を僅に三月にすぎむ鶴鳥の時とて其人を
吞食す故に小人相聚て恒に鶴と戦争す
子を生むるときは則ち洞穴の中を隠れて居る
以て鶴を避くときも「アリストテレス」人の説
に云く小人はまゝ泥濘河「アフリカ
川の大河乃近傍にあり

と云ふ蓋之を其詳なることを得ず知るべからず
と云ふ
まゝ思可奇亞コラシの属「ラステルセ」諸島の中
に於て一島あり稱して小人島と云ふ此地に於て
まゝ地城墟其深處に小人の遺骨全く
存する者城墟得る事多し蓋し此島昔時ハ
小人の居る所なりと云ふ事知るべし故に
此島小人島と名くると云ふ
今小人國と稱するもの三地あり其一を「サヒエテ

シナ星^ムの莫斯科^コ未^ア北邊海^ムの地^リ
してその北^ム「ワアイガット」^トの海峡^ヲを以^テ
新增白臘^ノ地^ニ對^スる人^ノ形^ノ軀^ノ甚^ニ短^ク小^シ
乾^ニ魚^ノの^ハ皮^ヲ以^テ糶^ルもな^ラず今^モ莫斯科^ノ
未^ア星^ノの^ハ地^ヲ治^メ其^ノ人^ニ散^ラシ^テ其^ノ二^ハ新^ニ
増^シ白^ク臘^ナり^テその^ハ地^ニ北海^ノ中^ニに^テ其^ノ人^ノ
形^ノ軀^ノ短^ク小^シして^テ所^ノ居^ル乃^チ室^ノ屋^ナり^テこれ^ニ稱^ス身^ノ
に^テ海^ノ獸^ノ乃^チ皮^ヲの^ハ鳥^ノ羽^ヲを^テ披^キ衣^トな^リて^テ日^ノ月^ノ
或^レ神^トな^リて^テこれ^ノ新^ニ種^ト其^ノ三^ヲ「スタラア

ト・ムアリス^トなり^テこ^ノ色^ハ臥^ル見^ル狼^ノ德^ト乃^チ西^ノ海^ノ濱^ニ
か^シて「アメリカ」^洲乃^チ「ヤメス・エイランド」^トい^ハ
る^ハ大^ノ島^ニに^テむ^クの^ハ地^ナり^テその^ハ人^ノま^ニて^テ形^ノ軀^ノ短^ク
て^テ皮^ヲ以^テ衣^トな^リて^テこれ^ヲ見^テ容^易に^テその^ハ男^ノ
如^ク辨^別誠^ニに^テ其^ノ身^ノ色^ハ素^クな^リ白^クし^テ
り^テも^ハ魚^ノ脂^ヲ塗^リが^ハ故^ニに^テその^ハ色^ハ恒^ニに^テ赤^ク
赤^ク黒^クなり^テり^テ

大馬^ノ諸^ノ獸^ノ年^々地^ヲ經^ルとい^ハども小^ノなる^ハ多^ク知^ル
生^ル乃^チ時^ノの^ハ如^クなり^テ志^ヲむ^ク乃^チ説^ク

「名ツテマシ」が奇方秘函ぬいさく「ヨオテシ」上巻に
徳重こしきの子孫の如乃馬保「アブラハム・ラサラス」とり
る人曾て禮勿泥ホニ臣ニの界に於る其地乃「
キツ・ケレエルド」宿名と云の子の危に逢くる成
救ひし事有りこれに因り謝するに一足の甚ぶ
小なる馬を贈り且その奇術を教ゆりち馬ウマ
猫等及びその他の諸獸を敵て長大なる
事して小なること初生り時の如くなる事
るの法なり此時彼処に居る馬の

なるばその「キツ・ケレエルド」の婦乃所蓄に
一の極く矮小なる犬ありこれまゝ此法を以て
如き小なる者なりとり其法を大馬
諸獸生れて數日経る眼始り開く時に
於て焼酎にこゝろをうりに小麥を粉と紅珊
瑚のこゝろ揉み細末に煮て飯をこれ四文を以てこれ
を解ふなりをなちとり獸をよき其天年
を保じとりども形の小なることを則ちとり初生
の時に異なるばこれをその法を容易よ

事も太た奇なるを以て玩物に具ふべしといふ

「カレキエツト」伝説

南印度「カレキエツト」を安日河の流に近く
この地稍大なり。國人を乃王族にして「サモリ」
とよみよる上地乃神とよむ義なり。世の
世々傳説の例加ふは、姉妹の子を立す
位成嗣のめりその王の至親子弟を放てその
統を嗣ぐと成得ずとよまむ一大異事なり

「アフリカ」洲を異説する人物の説

「アフリカ」洲を異説する人物の説
こと歐羅巴に倍す甚邊海の諸國を地とよみ
そめて豊饒なりとよむも其内地をこれに反
して氣候酷熱にして水泉絶て少く曠原
荒沙やともよむを數百里に直に猛獸鷲鳥毒
虫等きたる多し他邦より人跡至りかき地
地多し地氣かくのごとくに極て偏なるがゆゑに
其人物風俗甚殊異なりと絶て人類に非

が家者何れ或る初免る子或生めをわらへば
これ故食ふこれ故以て多子或生むに吉利な
るに或る者何れ或る衆数万或食りて恒
に遷移して居る定めは至る地毎にこれ
人氏鳥獸虫類も全うして悪く嗜ひるして
その地の生人亦或たやして而後に他方に徙る
何れ或る其人声音拳動まて大に固
き者も何れ或るその胸上に眼何れも何れ
とりよこれ等乃ち或る二三百年来西洋 波^おル

杜^ト瓦^ガル^ル四乃人その内地の邊に通商して
傳言する不なるまゝその海邊絶海の地に一個
何れ「エジパンス」と名く其人とな人身半足に
して鯨鮓その走ること甚速なりまゝ一か何れ
「アルビノス」とりよその色乃四面をもあ黑人乃
地なりとりよども特異其色も其色も甚灰
白みして恰も死人の色に如く絶く生きあ家
人の色に何れ故に近傍諸國の人をこれ故
稱して鬼魅として散る相通する事あり

とりふ

莫臥兒のハ羅羅の尊號の説

大莫臥兒モゴルの本名「モゴリスタン」とりふ其始祖「タ
メルラアン」撒馬兒罕マハル軍アムド兵より其業成興して天竺諸
西域破滅して今印度第一の王者たる「モゴル」を
則ち其國主の尊號ありて「アジア」洲中に
於て金銀宝玉明珠諸珍宝に富めること最茂
一にして兵威強盛なる至尊大君とりふ義なき
とまゝハ羅羅シヤハの玉王と名号なり西の方書

めて稱する不遜長——これまゝ尊號ありて

これなき譯されハ天より保護する所の神聖
尊號を以てハ羅羅シヤハの大國を治め「エテア」の上都
に居る兵威無雙ありて一百の王侯は版徒——
金冠の宝位に昇る黄金美玉の宮殿に坐し
百珍萬宝を擁するをなりとりふ按はるに
漢の時の匈奴の表に天地所立日月所照匈奴大
單于と稱し階の時の突厥の表に自天生大
突厥天下聖賢天子と稱するの類に——

且宝物城以尊號とさるるまゝ一奇事と

羅 羅西乃説

羅^{シヤム}羅國も其地安日河の東にあり南も北極の出
地十度に起る北も出地十八度ありその周
廻およそ五百餘里<sup>日本の一
千余</sup>支那の西南諸國の内
於て其地最大にして隣傍の^{カボ}真臘・^{マカ}滿刺加
なこれに臣服す其内分る十一道とす其國部を
「コヂア」とし<sup>又「サテヤ」
とも</sup>これその國王所居にして
其宮殿の制度甚美麗都内の人家凡四十餘万

王乃親衛乃精兵恒に五萬人をさし此國
近世兵威甚盛にして軍ありて兵を召すときは
暫時乃間によく大軍城出す王あるときは屋城
象に駕して幔幕を設く大臣諸將象に駕して
これに従ふ者多し兵器も銃砲弓矢刀鎗種々
全備す水戦も王の大船も義麗なる幔を以て
これ城飾り諸の戦艦これ城圍繞隨從し駭し
く砲城設きて外周に備ふ恒に兵城用て其隣傍
の「アラ」^{アラ}亞利敢・^パ琵琶牛・「ヤンゴマ」等諸國城征して

多くハ勝は諸國となし其怖る國中すして佛法
 我宗信すその寺觀佛像教法寺是て多くハ
 巫刺放^ア西と相同し其人色多くハ黄黒衣服の
 制まゝ他の印度に數人人家の制多し大竹
 地甲ハ獅子樹の葉以て屋を覆はる人其
 妻妻^アりりその妻たる者もその門戸相對の家
 より迎ふる者にして貞靜其主と妻する者も
 其高買擲にかへるの賤人にして物束なき者も
 妻乃生む所の子ハ男子をその家を嗣ぎ女子を相

對の人家に嫁す妻乃生む所を以て奴婢
 と名を富人も或は些少乃家私を分ち田宅
 或はふるも其大抵その風俗和怡魯鈍なり
 たりともその内習瑟^アる者もよく文學
 諸藝地理航海高賈等の業也よくすも寛永
 中に幡茄の^ア人宗心なる者再び此國に渡海すそ
 乃宗心が話^ア書したる渡天物語と^ア書一卷
 其書中^アに記す所の風俗產物の類

 宗心ハ世にりふ天竺往來ある者なり其書宗心自分記す所に
 十九歳と云ふ

をまゝたもあつてさうなれども地理古跡等哉

記に不考きを免て疑ふべしして信ずるに多

らば其の書中に云某地を達摩おまの地なり其地の摩訶陀

論也一云云「ウリヒスラ」といふ城なりはあむう一空海と文殊智者

す日本に諸僧渡天せしといふ皆偽なりた入唐して學問を志すもの

めたらありいをんや空海を唐土より名譽をたつたる人なりども

初るべきなり而してその宗心が携へありし貝多葉

に文字殘記せしを乃浪華の書案葭堂の代東都

の本田氏名一葉城藏す並に羅羅國乃文字なるを

とり細き針乃しき物地以て善其上に刻畫志

しるを乃なり世にりよげ貝多葉をこの別物にけり

工鄂回乃説椰子の葉をとり辨葉啖指葉中に詳之

工鄂を亞弗利加洲西海濱の大國めしといひ

より歐羅巴に通せし西洋中興第一千四百八十四年

乃王の時につて其國人「ヤアコツフ・カコユス」

なる者始めて此地にしる其西東を亞昆心城玉

にしる西を大洋にむら南を馬拿莫大巴

に

日本文明十六年明の或作二十年甲辰より

波ポルル杜ト瓦カルル四ヨハン子ス第二世

亞ア昆ビ心シ城シ玉

馬モ拿タ莫ツ大バ巴バ

ハ島ハ布刺カウに接し北ムイも為子匿ア亜の諸部ニ畏ハハ
 す中に「ロアコエ」安ア取バ辣ラ・工シ鄂ブ「ガイ」バツタ「班シ戎ゴ」
 「ワシダ」崩シ罷バ「ペンハ」等の諸部成分はその地す
 て川流多く椰子燂カりて駭カく香カ椽カ橘カ柚カ
 の類必産す又多く椰子燂カりてこれ地以て榨カ
 酒を醸すも其「レリユンデ」とりける川も
 乃邊よりして「シニール」ハドルの地に直るま
 の間々則セ独ヤ麻ロ樹スの根ノ及種々佳菓燂カむすの
 樹滿列を和蘭の人多く此地よりして香カ桂カ

燂得るまゝ此地所産の象を他國の産に比す
 きも最大なり一牙の重さ二百「ポンド」有餘にい
 多「ポンド」を
九十六なる又「エウテイニシ」とり鳥カり其
 皮甚貴し王族の衣を以て服カにすすも
 名不其入皆多くも黒色なり奴ユ皮ビ亜アおふひ
 為「コイ」匿ア亞等乃人に比るれを最黒くして且醜し
 其性和怡にして好邦の人遠くして居る者れ皆
 よく是れ禮待に身軀柔弱カりて力少なり
 歐羅巴「エウ」の人は以て其十に五なる足る俗錢貨

を用ゆるる城郭はすなはち小さき金銀のいまぐ
鍊さる塊城以て物に如くと交易は商長貴
人等頭の方中城に似たり孔雀或は駝鳥の羽
城以て飾となすを乃上躰を裸身に
たゞ鎖の如きを乃城以て胸背を括む兵器
を多し弓矢短剣のたまはち銃を用ゆること
巧まきと皆歩兵ありて馬城用ゆることを知
す鎧も樹皮わたり水牛皮のみ其國王城馬し
て馬泥とりゆに馬泥工鄂。マニ。ハムマ。マニ。

マニバンダ一等の驛は波爾杜瓦ル國人とに
至るまで地城開き衆を植るその諸地に掘り口ヲ
ンカ。シント。バウロ一等の地に城郭を築き商師を署
し又その安臥練の國王城捨みして千六百六十七年
ころ城^リ里^ス西^ボ波^ア亜^シ波爾杜瓦ルの地乃銀鑛を用
くまき僧官城遣して政教を施し此諸國の人今
大羊その教に帰服すといふ

「アントロポハアイン」の説

上右の世みを「キリイキス」の中一種の人因城

食ふの國なりこれ城「アントロポハージェイ」と稱せし
となり今「アントロポハージェイ」と稱するの地を亞弗
利加洲の中を島以布刺・贊西拔赤等の海邊の
地ありび「マコ」を等ありにまゝこれなり「亞墨利加
洲」に於てハ怕西見ありび「テルスマケツテニカ」の部内を
まゝこれなりまゝなる人因て食むるの徒なり近世よ
り伊斯把亞西等の多くこれ等の地にりたりて
教化を施して惡俗中よりやく改むるりともその内地
絶遠なり知かりたりてハ高いまゝを乃化流行するに

いゝすとりふ

入ル馬泥亞國の鬼城鬼塔の説

入ル馬泥亞國「子デル・パルツ」の地に高山あり「名ドリ
ン・ヒエルク」とりて城ありること一里なり此山よ長
き垣ありて恰も城垣建たるに似たりと云大石城あり
ほめ砌成して造築をみけり奇巧なり此所ハ山
道きよめて險阻艱難にして絶る人工城りすべき
乃所ありて相つゝ古より時に鬼神乃造建する
る所なり故に名きて「トイソルス・ニウウル」とりふ

「トイフルス」ハ鬼魔なり
「ミエラル」ハ垣なり
ちちなる大掣比とりなる大河乃曲流する所乃高き
岩石乃上頂に奇巧なる高塔あり上層に蓋な
しこれ昔「ラトルツヒエルク」地名の僧官「ツリエノ」と
りなる人の徳に感して鬼神これ塔造れり故に名
けり「トイフルス・トラル」とり

勿獨奈亞國の都城の説

勿獨奈亞ヘ子シも意太里亞イタリヤ國の中あり東北邊の國
なり世及せざる自立る王ありこれ城はむこ

是を國中乃世家の中より一の最功德の者
故推す主となす者なりその都城もまじく勿
獨奈亞一名「ヘセ」と名くこれ「ラギナ」とり
潮あき潮中に河を此潮中みせ十二乃甚小な島
島ありに固きこれに拠り亦城楯となし城は
市中に建はる又周廻ありそ八里城中の街衢皆
寫上に在るか故り其幅多くそ狭し五百餘処
に美藤なる橋は通しそ以り往來に便りす
城中まじく水なるに固き由人船と造りそ甚功

なり其最大なる橋也「イルボンデリアル」と名
く意く「マルメル」石玉石の石を以て造る橋上の
両側に美麗なる人家を建列しその橋甚しく
高くして大小の風帆恒に橋下を過る此城中
に美麗なる宮殿一百五十餘處七十の大寺觀三十
九乃男子の説教處二十八の婦人の説教處十八乃
大神祠十七乃大なる養病院一百十五の高臺五十
三乃大小直市場五十八の飛泉湧水百六十四處
「マルメル」石を以て造る古人乃巨像二十三か金

銅の類を以て造る巨像あり

鐵門関乃説

亞細亞洲日阿爾日亞國に名譽乃城地あり「アルベ」
と名く北高海城離ること九を三百餘歩其城一の
山上に在る要害きめて堅固に地勢狭長に
道路險阻これ百兒西亞等の諸國より諸の北方諸
國に往來する諸方咽喉乃要路なり初を百
兒西亞の王の城有るを一千七百二十二年
日本の享保七年 莫斯哥末亞國の伯多球弟一世の
徳の康熙六十一年

帝兵攻遺してこの城奪ひ取らるる守城置るこ
ま城治む地を都見格四乃人を呼て「ケロオカ
」とりよこの鐵門と之保要うしてその要害
堅固なること世にまげれとるに固く存る者
とりよ

按ずるに明世所刻の葛國乃國に北高梅の
邊に鐵門関ありまゝ之を大祖西城諸を
破滅して西乃方鉄門関にりて還る
の事諸書に記たり思ふに此地あふんを

高考ありて「まゝ亞刺比亞人此
城稱して「ハツプ・アルアビエア」とりよ
是諸門関中乃門関とりよる養ありてま
くと乃堅固城贊より此をとりよ

「ケロオカ」の説

韃靼部中の是の歐羅巴に近き所
一回り名多て「ケロオカ」とりよ其人を身
体に塗るに種々の彩色を以て其形貌も
めり奇怪ありて怖る心馬乃乳ありて血城

ま〜〜このと食ふこの城最上の美味とす
人々を武と好む小事の事を互うに相戦争に
大に獲れをかな〜に其皮を剥ておのれが
身に纏て衣とな〜〜以て其巧を表すと
り

「ガツリユス」河水乃説

小亜細亞「フレイジヤ」國の地に河あり「ガツリ
ユス」と名く其源を「ケレニス」とりける大山より
りて、流れて「セルゲル」とりける大河に合は此カ

ツリユス」の水其味ききめり其美に〜〜
飲めを人を酔せ〜〜と身体を快暢〜
腸を清潔せしめ〜〜これを以て衰弱の症に用
ひ〜〜甚切なりとり

莫可收西乃説

北亞墨利加洲の新諸厄利亞西の邊に一種
の夷狄あり〜〜莫可收〜〜其人を
野獸の皮を以て衣となすその形状も亦
多怖る〜〜性質も亦極めて強暴鄙にして

盜賊を以てこれが業と爲るに故に他邦の人
なその寇掠を怖れずと乃暴暴無智なるを
察して恒に計けずこれを破逐す而して其
部中を盜賊以て業と爲るとりども其法
可もてその骨肉長者乃物故盜むる故禁は
若しこれ故に若し是を則ち是故捕へて
生をづかす中に埋むとり

多嵐島の説

亞弗利加聖老楞佐島乃邊に一島あり「マウ

リツツ」とりよ此地島本故あするりさそめとあ
と故に喜望峯城鎮する所なり和蘭の人其
所領地乃野人を遣して其本城所取らしむ
此島氣候融和なりと絶て毒物なるといふ
も満島を嵐にして其多きりけり計ふ
をくはと云云

那波里乃石室の説

意太里亞回那波里乃府成より「ボツシリポ」と
りよ西地乃相通するに山城廻繞して行く故に

道路稍迂遠なりこれによはる四人その名山を
鑿ちり大きなる洞穴を開く其長さ一千里に
レエデシレり一「シケレエデシ」を和名
曲天五尺五寸なりと云あり道城ゆけを兩地
暫時に相通は對視せれば恰も大なる星に對す
るが如く名をて「ゴロツク・ナボオリ」とりふ

「ゲ井ム子エテ」の説

黒地瓦皮亜の中に一種の洞あり黒地瓦皮亜を亞弗利
加洲の黒人諸國を云
「ゲ井ム子エテ」と名く其人を裸躰にして衣
と著るる或は知るに常に弓矢を提ぎ猛獸を射て

其再必食ふ水澤の間の洞穴を鑿ちてこれに居て
その多量飲むに浴す且穴中にかくれ居て獸を
射るに便す去るれども地底豹猛獸の類をため
多きを以て睡眠の時これを咬食せしむることと畏
る故に夜にこれらを皆大樹の上に臥して其害を避
くといふ

不老不死乃王といふ説

拂郎鞞國を歐羅巴洲中乃最も有名の大王国
みして地もまゝ甚大なりとな一王あり有に

屬に國中多し十二道となしと守令設置
其太祖「フウニコス」なるを乃「カツリア」回
代て回城建う後に王「サリス」聖徳有
て悉く回法を定むるに四人其徳に略し是よ
りして其子孫相嗣ふ専ら天子代りて民
を救ふを以て勢となし國勢日に盛に
近傍諸回多しこれに由りて今に至るまで凡
一千四百年回法を治りてたかく禍乱を
回富く物饒みし人みな其業を樂し

むゆに世に此回王は賢徳し長生不死
乃君よりよくなむ

西洋雜記卷之四畢

